

第 11 章:ヘブンズドア



ガブリエル:「ようこそ。天界へ…」

ヒロ:「天界？」

ガブリエル:「そう…あなたの現世での魂は消滅したのです。ヘブンズドア…ここを通ればあなたは楽園へと到達します。」

ヒロ:「そうか…花恋は無事俺のカラダに入れたんですよね？」

ガブリエル:「ええ…でも…あなたを失った悲しみから立ち直れていません。」

ヒロ:「そんな…何とかできないのですか？」

ガブリエル:「私にその力はありません…ただ…」

ヒロ:「何か方法があるのですね？」

ガブリエル:「はい。あなたが現世に転生するのです。ただし、目的を達成してもここに戻ってくることはできず楽園には到達できなくなります。」

ヒロ:「転生…」

ガブリエル:「通常はこんなに早く転生することはできません。しかし、あなたは花恋さんを愛し自分を犠牲にして彼女を守りました。その慈愛に満ちた行為によりわが主ミカエルさまが特別にこのタイミングでの転生を許可してくださっているのです。」

ヒロ:「花恋の助けになるなら、楽園になど行けなくてもいい。ところで俺はどんな状態で転生するんだ？」

ミカエル:「私から説明しよう。通例は胎児として新たな生命を受けることになる。ただお前の場合、特別措置となるため、間もなく命を失う者の肉体に宿ることになる…死因はいずれも怪我や病気ではない。生き返った途端に死ぬことも後遺症が残ることもない。ただその肉体で死ぬまで生きることになる…」

ヒロ:「誰になれるんですか？」

ミカエル:「幾つかの選択肢がある。今リストを見せてやろう。対象者は 10 人、男だと 2 人候補がいるな…」

ヒロ:「俺男なんだけど、男だと思ったより少ないんですね…」

ミカエル:「そこはあまり気にするな。お前の魂と波長が合い今日命を失う者となれば、全世界でも対象は限られてくる…全く対象がいない場合もあるから選べるだけましだな。」

ヒロ:「明日以降で選択することはできないのですか？」

ミカエル:「明日以降まで待つことはできるが、乗り移った際のお前らしさは急激に失われてしまう。3日も経てばお前らしさは全くなり、ほぼ別人となるだろう。もちろん花恋と会える可能性もほぼなくなるだろう…」

A: 日本、56 歳既婚男性、経済力◎、持病あり、大手企業役員
B: アフリカ、19 歳未婚男性、経済力並、健康、スポーツインストラクター

第 12 章: 心がカラダを追い越してきたんだよ

ヒロ:「わかりました。このリストから選びます。Aは年齢と持病ありっていうのが気になるし…Bは日本じゃないけどこっちが良さそうか…」

ガブリエル:「あなたは現世に戻って何を望むのかしら？花恋さんとの恋人関係を望むなら今の彼女は男性…男性の肉体に入って蘇ると、恋人になれないことはないと思うけど、苦勞するかもしれないですよ。それに子どもを授かるのは難しいでしょうね。」

ヒロ:「俺はいつか花恋と結婚して子どもが欲しいと思っていた。その望みを叶えるためには男ではなく女にならなければならないのか…」

ミカエル:「夫婦とならずとも良好な関係は築ける。転生した際に記憶を失うとは言え、お前の魂は男。女の肉体で生活していくのは大変だぞ。」

ヒロ:「そうかもしれませんが…でも俺は女になります！記憶を失ったとしても俺はきっと花恋を見つけ出し今度は俺が妻として花恋を支えます！」

そこで亡くなる運命だとしても既婚者の肉体に乗り移ってその人のパートナーと別れて花恋と一緒にすることはできない。俺は 40 歳未満で未婚の健康な女性に絞って転生先を探した。リストの女性 8 人のうち該当は 3 人いた。

C: 北米、37 歳未婚女性、経済力◎、健康、投資家
D: 中東、24 歳未婚女性、経済力×、健康、ダンサー
E: 地中海沿岸国、8 歳女子、経済力○、健康、小学生



ヒロ:「日本にはいないのか…8 歳の女の子になると花恋と 15 歳差になるし、結婚するにしても 10 年後…そんなに長い間、待てられない…そうするとCかD…Cは上品な感じの女性で育ちも良さそうだ。自由に動けそうで経済力があるからすぐにでも日本に渡航して、花恋を支えれると思うけど、花恋とはだいぶ年齢が離れてしまう…それに俺の魂がその年齢で出産に耐えられるかどうか…D は健康そうな女性で花恋と同じくらいの年齢だけど、経済力があまりないから日本に行くためにお金は貯めなくてはならないか…プロダンサーってことだけど俺ダンスなんてできないからお金を稼げるかどうか…」

ガブリエル:「ダンスのスキルはあなたがその女性に乗り移ったときに自動的に習得するから大丈夫ですよ。あと、あなたの記憶は封印されますが、被憑依体の記憶は利用できます。嗜好などはあなたのものが引き継がれますから、被憑依体と嗜好が大きく違くと、あなたが憑依することで大きくそれが変わるので、周囲の人は驚くかもしれませんね…」

ヒロ:「記憶が封印ってことは俺の記憶が復活することもあるんですか？」

ミカエル:「何かきっかけがあれば不可能ではない。同性間ではその機会は多くなるだろう…」

ヒロ:「俺が女になった場合は無理ですか？」

ガブリエル:「いえ。無理ではありません。ただ、それがあなたにとって幸せかどうか…」

ミカエル:「今まで女として生きてきた人生に突然男の記憶が蘇るのだ…」

ヒロ:「覚悟はしています。でも俺は花恋を支えればそれだけで十分です！」

ミカエル:「わかった…もはや何も言うまい…さて…転生先は決まったか？」

ヒロ:「はい。」

俺はボタンを押す。

ミカエル:「ファイナルアンサー？」

ヒロ:「ファイナルアンサーをお願いします！」

緊張感のある音楽が流れる。ミカエルが神妙な顔つきで何かを言っているが俺はそれを聞き取ることができずに深い海底に沈むような感覚となり、その後、柔らかい声を聞いた。

(あなたにあたしのすべてをあげる♥受け取ってね。あなたはあたし、あたしはあなた…)

(はい…俺、いえ…あたしはあなたです…いただきます、あなたのすべてを…)

第 13 章:これでいいの、自分を信じて

2019 年 2 月 20 日…

父:「エイル！エイル…」

あたしはその声でゆっくり目を開ける。

母:「良かった…あなたが巻き込まれたっけ聞いたから急いでここに駆けつけて…」

父:「外傷は全くなかったんだが、1 週間も意識が戻らなくてな…医師からも覚悟を決めてくれと言われていたんだ…」

あたしは徐々に思い出した。あたしの名前はエイルール、トルコ語で 9 月を意味する。みんなはあたしのことをエイルと呼ぶ。中東育ちの 24 歳ダンサーだ。父と母に愛され、貧しいながらも充実した日々を過ごしてきた。あたしは家を出てジプシーとして各地を旅し、生活費を稼いできた。久しぶりに父母のいる故郷に戻ってきて再び旅に出ようとしたときに地震に巻き込まれ意識を失った。

～天界～

ミカエル:「無事転生したようだな。」

ガブリエル:「ええ…これで歴史は変わります。この日、あの地震による唯一の犠牲者:エイルールは生き続けることになります…」

ミカエル:「あとはお前次第だぞ。ヒロ。」

最近、あたしには気になっていることがある。かけがえのない人。眠っている間にもその人の夢を見た気がする。顔は覚えていない。でもその人と一緒に過ごす何気ない時間は心が躍る♥…あたしは日本が何故か懐かしく感じた。何故かわからないが無性にそこへ行ってみたい。行かなければならない気がする。あたしは旅行費用を必死で貯めることにした。東京までの飛行機運賃は格安で片道 6 万円、長期滞在ホテルに 2 週間宿泊するとして 5 万円、日本国内の移動に 3 万円、1 日 7000 円使うとして、30 万円必要…今のあたしの稼ぎだと 1 日手取りで 5000 円、8 割は生活費に使っちゃうから…1 年は掛かっちゃう。あ…お父さんとお母さんにも仕送りしたいからもっただね…今の倍稼ぎたい。

あたしはこれまで 1 日 1 ステージだったパフォーマンスを 2 ステージ、ときには 3 ステージに増やした。レストラン、夜の野外舞台、山岳地帯の集落…



エイル:(しなやかに…そして激しく…あたしのこの舞でお客さんを魅了するんだ…)

男1:「エイルちゃん、今日のダンスも最高だったよ！今夜ホテルでどう？チップは弾むからさ。」

エイル:「お褒めいただきありがとうございます。でもごめんなさい。あたし…そこまではできないんです…」

あたしには恋人はいない。これまでもいたことはない。このように声を掛けられることはあったが、お金のためにワンナイトを受けることには抵抗があった。だからあたしは処女のままだ。もちろん男性との営みに興味はある。でもそれは本当に好きになった人のためにとっておきたいのだ。いつかきつと巡り合うであろうその人のために…

第14章:喜びと悲しみの間に

あたしは師のカミラ先生とこの街に来ていて今夜のショーを終えて宿屋で一緒に話している。カミラ先生は36歳、ターンが綺麗で表現力もある。ベリーダンサーCamillaの名前だけでお客さんが集まるほどの人気だ。スキルだけでなく人間的な魅力もあり、あたしはカミラ先生を尊敬している。

カミラ先生:「エイル…最近の貴女は気持ちが舞に反映されていて表現力が格段に上がっているわ！あの地震の後くらいからだけど、何かあったの？」

エイル:「いえ…ただ…気になる人がいて…その人が目の前にいることを想像すると、自然と心が開放的になって自分を出している気がするんです♥それに日本に行くためのお金も欲しくて…」

カミラ先生:「女はね、目の前に愛する人がいると自然と最高の笑顔になれるのよ♥」

エイル:「カミラ先生にもそういう人がいるんですか？」

カミラ先生:「ええ…いたわ…8年前の地震が起きるまで…」

エイル:「！…ごめんなさい！あたし無神経なことを…」

8年前の大地震でこの国の一部の地域は壊滅的な被害を受けていた。カミラ先生はその地方の出身だった。あたしは知らなかったとは言え、無神経な質問をしてしまった…首を振るカミラ先生。

カミラ先生:「あの地震であたしとあの人は別の場所で被災した…あたしは地震があったとき、何

かにぶつかって意識を失ったんだけど…気づいたら病院にいてね…回復後退院して彼のことを探したけど見つけれられなくて…」

エイル:「そう…だったんですね…」

カミラ先生:「ええ…でもあの人はどこかで生きている気がする…例えあたしのことを忘れたとしても幸せに暮らしていて欲しいと願うのよ。」

あたしの頭にデジャビューのような感覚が蘇る。なに…この感覚…

カミラ先生:「どうしたの？エイル？」

エイル:「いえ…そんなにカミラ先生に思われてその人は幸せだなって。」

カミラ先生:「そうね。エイルもいつかきっとそう人に逢えると思うわよ…あなたの舞に心を動かされない者はいないわ…あ、そう言えば 8 年前の地震と同じ頃、日本でも大地震があったわね…」

エイル:「！カミラ先生…その話、詳しく教えてくださいませんか！」

カミラ先生:「ええ…あたしもそんなに詳しくはないけど、スマホで調べればすぐわかるから…あ、エイル、スマホ持ってないんだったわね。一緒に見せてあげるわ。いらっしやい。」

あたしはカミラ先生と一緒にスマホで日本の大地震のことを調べた。日本の東側で広範囲に起きたその地震…特に S 市では甚大な被害が出た。その後、国民全員が一致団結して見事に復興を果たしたのだった。この国からも多くの支援をしたと聞いている。同じ年にこの国の東部でも大きな地震があった。さっきカミラ先生が言っていた地震のことだ。そのときに日本からも支援をもらった。日本…どんな国なんだろう…あたしたちと同じように苦難を乗り越えた人たちってどんな人たちなんだろう…

1 年後、やっと資金が溜まり、日本へ旅立とうとした。しかし、あの出来事が起こったのだ…COVID-19。それは瞬く間に世界に広がり、あたしたちの世界は短期間で激変した。今までの常識が常識ではなくなった。多くの人が罹患し命を失った…助かった人でも後遺症が長期間残った人もいた。カミラ先生も病に倒れた…あたしたちは旅を続ける機会さえも失ってしまった。もちろん外国への渡航も禁止になった。そんな状態が 3 年間も続いた。でもあたしは諦めなかった。その間に日本語を独学で学び、日本のことを知ろうと情報を集めた。

やっと感染の波が収まってきた 2023 年の冬に再び大地震があたしたちを襲った。21 世紀以降、5 本の指に入る死者を出したその地震。度重なる不幸な出来事にみんな辟易したが、あたしはその日が来ると信じて機会を狙っていた。そしてついに 2023 年春、日本への渡航が解禁されたのだ！でもいざ旅立つとなると、色々な想いが交錯した。震災の爪痕はまだ残っている。こんな中、あたしは旅に出かけていいんだろうか…

父:「エイル…行ってこい、日本へ。そのために 3 年間頑張ったんだろう？」

母:「そうよ。私たちのことは気にしないで。幸いここは地震の被害はほとんどなかったし、あなたからの仕送りも十分あるから。」

エイル:「ありがとう、お父さん！お母さん！」

父と母の後押しもあり、3 回目の予防接種を受け、あたしは日本へ旅立つことにした。

第 15 章: さあ行くよ、New World

2023 年 4 月 28 日、あたしは早朝、飛行機で東京に到着すると、新幹線で S 市に向かった。新幹線の発車音楽にノスタルジーを感じ思わず口ずさんでしまう。S 駅に着き辺りを見渡すと、「5 月 3 日ベリーダンスショー 出演 CARO」のポスターが目に入った。ベリーダンスショーか…日本でもあるんだね。昼食時間帯となったため、楽しみにしていた牛タンを食べることにした。あたしが駅前を適当に歩いていると日本人と思われる男性があたしに声を掛けてきた。



男:「あの…何かお探しですか？」

エイル:「ええ…この街は牛タンが美味しいと聞いたのでお店を探していたんです。」

男:「美味しいお店知ってますので…良かったら私が案内しますよ。」

エイル:「ええ…ご厚意は嬉しいのですが…」

男:「すみません。いきなり知らない男に声を掛けられたら引きますよね…」

エイル:「いえ…あなたはいい人だと思いますし、話していると何だか心が和みます。あたし、日本は初めてなので案内してくれますか。あなたのお勧めのお店に。」

あたしたちは、その人のお勧めのお店に入って、牛タンセットを注文した。お互いに自己紹介をして話し始めると思いのほか共通の話題があり話が弾んだ。ただし少し気になることが…あたしが食べているとき、その人はじっと見つめてくるのだ…

エイル:「あの…何か食べ方、変でしょうか？」

男:「いえ…外国の方ですから箸の使い方には慣れないと思ったのですが…私の知っている人と

同じ独特な持ち方だったからつい見入ってしまって…」

エイル:「日本に来る前にだいぶ練習したんですけど…やっぱり変なんですね…」

男:「いえ…あなたは日本語もお上手だし、日本のことも良く勉強してらっしゃる。どうしてそこまで日本に来たいと思ったのですか？」

エイル:「自分でもわからないんです…ただここに来れば何かわかりそうな気がして…ベリーダンスをしながらお金を貯めて日本に来たんです。」

男:「ベリーダンス！奇遇ですね。僕もやっています。ベリーダンス。今度ショーに出演することになっていて。あ、自己紹介まだでしたね。私、CARO っています。」

あたしは駅前で見たポスターを思い出す。

エイル:「もしかして、5月3日のショーですか？」

CARO:「はい。よくご存じで。」

エイル:「駅のポスターで見ました。日本で男性ベリーダンサーはほとんどいないって聞いていたので驚きました。あたし、エイルールっています。」

CARO:「エイルール…素敵なお名前ですね…ベリーダンスは本職ではなくて趣味ですが、縁あってショーに出していただけることになって。」

あたしたちは食事をだいぶ前に終えていたが、待っているお客さんの数が増えてきたのに気づいた。

CARO:「食事も終わっちゃったのに話し込んでしまいましたね…宜しければもう少しお話を聞いてみたい。場所を変えて続けませんか？」

エイル:「ええ…喜んで…」

CARO:「お酒は飲めますか？少し早い時間ですが。」

エイル:「はい。飲めます。」

第16章:君に巡り合えた

あたしは CARO さんに付いていった。何だろう…この道、あの店、肌に感じる風、昔、一度…いえ…何度も通ったことがある…あたしは立ち止まって考える。

CARO:「どうしました？…！」

CARO さんはポケットからハンカチを取り出し、あたしに渡してくれた。あたしは涙を流していた。

エイル:「ありがとうございます…花粉症？ですかね(笑)」

CARO:「ホームシックかもしれませんね(笑)」

あたしは再び CARO さんの後に付いて行くと、お洒落なバーに入った。

エイル:「素敵なバーですね。あ、でもあたし、それほど手持ちもなくて…PoyPoy もチャージ額があまり残っていないんです。」

CARO:「僕からお誘いしたんです。ここはご馳走しますよ。」

エイル:「ありがとうございます。それではお言葉に甘えて。」

CARO:「何を注文しますか？何でもどうぞ。」

エイル:「それでは…ウイスキーをロックをお願いします。」

CARO さんは動きを止めあたしを見ている。

エイル:「あの…高すぎたでしょうか？」

CARO:「いえ…女性でウイスキーのロックは珍しいなって思って…それに…いやそんなはずは…」

エイル:「何か気になることがあるなら言ってください！」

CARO:「もしかしたらあなたと私は前にどこかで会ったことがありますか？」

エイル:「いえ、それは…あたしは日本に来るのは初めてですので…でもあなたと一緒にお話をしていると何故か懐かしさを感じます。」

CARO:「私も同じです。あなたを見ていると昔を思い出す…」

ふと CARO さんのスマホの待受画面が目に入った。女性の写真だ。この人見たことがある！

エイル:「恋人ですか？」

CARO:「…いえ…でも大切な人です。」

エイル:「見せてもらっていいですか？」

CARO:「ええ…」

エイル:「この人…あたしが夢で何回も見ている人…」

CARO:「え？どういうことですか？」

あたしは CARO さんにその人と過ごした夢のことを雪崩のように話した。すると CARO さんは、

CARO:「…この人は花恋というんです…」

エイル:「かれん…」

あたしの脳にその名前がリフレインする。と同時に激しい焦燥感が全身を駆け巡る。

CARO:「エイルールさん？」

エイル:「大事な人、忘れたくない人、忘れちゃだめな人…あたしのかげがえのない人…」

CARO:「ああ…そんな、やっぱり！姿は違うけど、あなたはヒロ君…なのでしょう？」

エイル:「ヒロ…そう！あたしはそう呼ばれていた、気がする…花恋…あたしの大切な人…」

CARO:「ヒロ君だよな？あたしだよ。花恋！あなたの恋人だった。ヒロ君がくれたこのカラダにいるのはあたし、花恋なの！」

エイル:「かれん…あたしのこいびと…」

花恋 in ヒロ:「ええ…あなたはあたしが消滅しないようこのカラダをあたしに残してくれた…」

エイル:「ショウメツ…ダメっ！嫌、いや～～！」

あたしの心にたくさんの記憶が流れ込んで混ざり合う。花恋は混乱したあたしをハグして頭を撫でてくれた。ああ…あたしの心が落ち着いていく…

花恋 in ヒロ:「ヒロ君、もう大丈夫だよ♥お帰りなさい…」

ヒロ in エイル:「本当に花恋なの？ずっと逢いたかった♥」

花恋 in ヒロ:「3年半、待ってたんだよ。こんな可愛い女の子になって戻ってくるなんて♥」

ヒロ in エイル:「ごめん…花恋は男になったから、あたし…じゃなかった…俺は女になって…」

終章: with you ,again and forever

花恋inヒロ:「男でも女でもどこの国でもヒロ君はヒロ君だから。逢えて嬉しいよ♥」

ヒロ in エイル:「花恋は花恋のまま、女の子だね。」

花恋 in ヒロ:「うん！男になって大変だったけどヒロ君にもらったこのカラダ、大切にそして有意義に使わせてもらってるわ。CARO って言うのは…花恋とヒロから取ったの。」

ヒロ in エイル:「その言葉は俺たちの国で”愛”って意味があるんだ。」

花恋 in ヒロ:「ヒロ君の生まれた国…いつか行ってみたいわ…」

ヒロinエイル:「花恋…君に今恋人がいないなら…」

花恋 in ヒロ:「うふ♥もちろん、いないわよ！」

ヒロinエイル:「花恋…俺を嫁にもらって欲しい。いつまでも君を守るよ。Will you marry me？」

花恋 in ヒロ:「It's my pleasure！でも…それは男の私から言いたいセリフだわ…Will you spend forever with me?」

ヒロ in エイル:「Yes, I love you♥」

花恋 in ヒロ:「長かった…でもこれから2人で積み重ねていく時間に比べれば短い時間ね。」

バーテンダー:「聞いていましたよ。ご結婚おめでとうございます。お二人の門出を祝してこれをプレゼントいたします！」

シャンパングラスを両手に持つバーテンダーは花恋の姿をしていた。驚くヒロ in エイル。

ヒロ in エイル:「花恋？…ってことは中身はもしかしてうじゃなのか？」

ゆっくりと頷くうじゃ in 花恋。そしてその横に寄り添う一人の男性。



うじゃ in 花恋:「紹介するよ。妻の、いや夫の麻耶だ。」

麻耶 in 男:「ヒロ君が旅立った後うじゃも絶望しちゃってね。なかなか立ち直れなかったから、あたしが男の人に乗り移ってこうして支えてあげてきたの♥うじゃったらもうすっかり乙女なのよ(笑)」

花恋 in ヒロ:「麻耶のカラダを探すときはあたしも協力したの。無事乗り移るカラダが見つかってあたしの姿のうじゃと付き合っ結婚するって聞いたときは正直複雑な気持ちだったけど…(笑)」

うじゃ in 花恋:「花恋さんのお陰で俺たちは結ばれた。だから俺も麻耶も、花恋さんの愛したお前を絶対に見つけてやろうと思ったんだ。ここで働けばそのうちお前が来るんじゃないかと思ってな。」

ヒロ in エイル:「そうか！ここは俺たちの最初のデートコース…」

花恋 in ヒロ:「またここから始めましょ…女の幸せ…これからは僕が実感させてあげるよ！ヒロ♥」

ヒロ in エイル:「あ、いや俺が……そうね…あたしも…妻として夫の花恋を支え続けます♥」

麻耶とうじゃから差し出されたシャンパングラスに花恋とヒロの笑顔が映っている。誓いの口づけを交わす花恋とヒロ。他のバーテンダーたちもクラッカーを鳴らし、その場にいた客たちも一斉に拍手で二人を祝福している。これからは病が流行しても災害が来てもきっと二人は離れることなく、永遠に刻を分かち合うだろう。あんな出来事があっても国を超えて、時間を超えて、死すらも超えて巡り逢えたのだから…

